

近年しばしば「国際化」が語られるようになり、この表現が手ごろなキャッチ・フレーズとして、いたるところで用いられるようになっている。新聞や雑誌などで、わが国の経済の国際化を指摘したり、あるいは教育制度の一層の国際化を要請するといった趣旨の記事は、殆ど枚挙に暇がないほど目につく。また最近、ある総合雑誌では、オリンピックを契機とした「韓国の国際化」についての特集をのせていた。これらの場合を考えてみると、

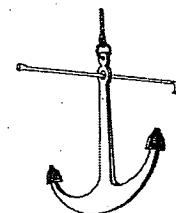
「国際化」とはある特定の国あるいは民族が、国際社会の正当な一員として認知されるとともに、その条件としてまたは結果として、なんらかの点で他国と共通の様式なり基準なりを採用するというほどの意味かと思われる。ただ、何れにしてもこの語は、ジャーナリズムが好み多くのキャッチ・フレーズの例にもれず、きわめて曖昧な内容のものであることは、おそらく否定しがたいであろう。

しかしこうした用語法は、ただ単にジャーナリズムの世界にとどまらず、今日ではアカデミックな研究の領域

## 国際化時代における宗教の機能

田丸徳善

### I はじめに



にも、少しづつ浸透する兆しがみえ始めている。例えば、かつては「外交史」と呼ばれていたような分野は、今日ではしばしば「国際政治(學)」と称せられるか、またはその一部とみなされるようになっている。また、多分この数十年の急速な経済関係の拡大を反映してであろうが、「国際金融(論)」あるいはさらにひろく「国際経済(學)」というような新しいテーマが、比較的に早くから確立していたとみられる「国際法(學)」とならんで、市民権を獲得しつつある。それがかなり多くの大学のカリキュラムに取り入れられている現状は、その明白な証拠ともよいであろう。これらは時として、その上位概念としての「国際関係(論)」のうちに包括されることがあるが、さらに興味をひくのは、やはり最近「国際文化(論)」などといふ、きわめて内容の捉えにくい呼称までが登場してきたことである。少し立ち入ってみると、それは従来の外国语ないし外国史などの研究を衣替えしたものにすぎない」とが多いが、それに敢えて「国際」という形容詞を付するところに、まさに現代の問題意識があらわれているといえなくはない。

「国際化」というのは、英語その他における‘international’の訳語として定着したものとみられる。かつてこれと類似の意味をもつて使われたものには、‘world.’または‘universal.’の語があり、それらは大抵の場合、「万国…」あるいは「世界…」という形ばかり誤りないと思われる。

「国際化」というのは、英語その他における‘international’の訳語として定着したものとみられる。かつてこれと類似の意味をもつて使われたものには、‘world.’または‘universal.’の語があり、それらは大抵の場合、「万国…」あるいは「世界…」という形ばかり誤りないと思われる。

に置き換えられていた。これらは完全に死語になつたわけではなく、一部ではなお依然として通用しているが、次第に「国際的」と言い換えられているといえよう。そして、上記のように、この傾向はアカデミックな世界でも認められる。例えば、今世紀の前半までの社会科学の成果をあつめ、セリグマン(E. R. A. Seligman)によって編集された労作が *Encyclopedia of Social Sciences*, 15vols., 1930-35 という題頭をもつたのに対し、現在それのかわる代表的な事典は、*International Encyclopedia of the Social Sciences*, 17vols. 1968 (ed. by Sills, Macmillan) と名づけられている。これはほんの限られた一つの例にすぎないが、よく全般的な動向を示すものといつてよい。

「国際化」という言葉、およそある事柄が意識され、さらには研究の対象とされるところとは、すでにそれが現実に否定しがたるものとして存在する」とを前提とするものである。少なくともその発端にあつては、意識化とそれにもとづく主題化とは、ある種の事実ないし現実の基盤があつて、はじめて成り立つるのである。当

然のことながら、この原則はまだ、いわゆるテーマである「国際化」とはハッキリしてはまる筈である。なんらかの形での国際化の現実が、それについての考察や分析を可能とし、また必要とするのである。それは、その国際化とは一体いかなる事態をさすのであるか。——ここでわれわれは、宗教の問題を考えるに先立つて、おもに意識と事実という両面をふくんだ国際化という問題について、しばらく検討してみたいことにしよう。

## II 国際化的意味と特徴

「国際化」が *international = inter nations* から由来するとしても、それは基本的には「諸国民のあいだの」あることは「諸国民の境界をいえる」というほどの意味だと考えられる。今までもなく、この「国民」(nation)の概念は、古代からこのながい歴史をもつてゐるが、それが今日ふつうに理解されるような形をとるにいたつたのは、端的にいって近代以後の「ことみる」とができる。近代、すなわち大体十七世紀に入るころから、とくにヨーロッパにおいては、一方では地方的・封建的な統治組織

と、他方ではキリスト教にもどづく普遍的な統一文化とがしだいに崩壊して、それぞれに特色をもった国民国家(nation-state)が成立し、今日に及んでいるわけである。ここで注意すべきことは、かくして成立した「国民」が、実際には複雑な要因をふくんだ複合的なものだということがある。それはある特定の地域に居住して生活を営み、共通の言語・習慣・宗教など、すなわちひろい意味での文化を共有するものではあるが、同時にまた一つの政治的な単位をもなし、他から区別されるのである。

これらの諸要因は、その適用される範囲にかんして、必ずしもつねにたがいに一致するとはかぎらない。それらは、現実にはいろいろな形で結びつきうるが、便宜上、仮に三つの範疇にわけてみることが可能ではないかと思われる。すなわち、有形・無形の財の獲得、産出ならびに交換という、生活の下部構造をなすものとしての経済的な要因、集団としての統制にかかる政治の要因、そしてそれらに支えられつつ、しかもそれらに影響するところの文化的な要因とである。宗教も、差し当たっては、この第三の文化的な要因にかぞえておくことにしよう。

象と解することができる。また、上述のように、これらの諸要因のカバーする範囲が決して同一でないことも、事態をさらに複雑にする一因といつてよいであろう。例えば、およそ言語は文化の基盤ともいいうべきものであり、民族を構成するに不可欠のものであるが、一つの国民国家が必ずしも單一の言語だけでなく、むしろ複数のそれを認めていくケースはかなり多い。いわゆる多民族ないし多言語国家と呼ばれるものがそれに当たる。反対に、言語を共通する人びとの範囲、すなわち言語共同体は、しばしば国家の境界をこえてひろがっているのである。

これはどこにでも認められる、ごくありふれた事実にすぎないが、テーマである国際化の考察をすすめるに当たって、忘れてはならない重要な一つの視点をなすものである。というのは、このことは国民国家といいうものが、決して絶対的な準拠枠ではありえないことを意味するものにほかならないからである。今日の国民国家は、もはや单一ないし等質的なものではなく、それ 자체としてかなり複合的な構造をもつてているのがふつうである。それらは、いま述べた多民族あるいは多言語国家といった場

ところで、これらは、その作用という点からみて開放と閉鎖、凝集と拡散という、相反する二つの方向性をしめすと考えることができる。経済的な要因、とくにその一環としての交流活動は、概していえば開放あるいは拡散への可能性をもち、実際その方向に働くことが多い。古来、通商や交易がしばしば異なる地域、国々、民族のあいだを結びつけてきた事実をみても、このことは明らかであろう。これに対しても、このことは明らかである。これに對して政治的な要因は、何れかといえば、閉鎖性をつよめる傾向がつよい。そして第三の文化的な要因は、状況に応じて閉鎖と開放とのどちらにも作用するものとみられる。

もちろん、これはごく一般的な傾向性を述べたものにすぎず、実際の姿はこれよりはるかに錯綜している。例えば、経済は開放を促進する要因だといつたが、それが場合によっては、一見逆の閉鎖的な方向をとることもあることは、いわゆる保護主義をめぐっての最近の論議をみても明らかである。これは、本来はある意味での合理性に従つて動く筈の経済活動が、もう一つの重要な要因である政治によつて、異なる方向にむけられる現

合を別にしても、殆ど例外なしに、多くの下位集団を自らのなかに抱え込み、それらの微妙なバランスのうえに成り立つてみるとられる。それは、主に経済的な地位の差にもとづく階層であることもあるろうし、また政治的な路線の区別にもとづく政党といつたものであることもあろう。さらには資質とか教育の程度とかによる、エリートと大衆との別も考えられる。何れにしてもそれは、内部にいろいろな要素をふくみながら、外部に向かつては「主権」という形である種の統一をしめすという、折衷的な性格をもつのである。

以上かんたんに指摘したことは、今日のいわゆる国際関係を考えるための、最初の手がかりを提供してくれる。この関係はいろいろの角度から、またいろいろなレベルにおいて分析してみなければならない。まず最も形式的には、それは国家と国家とのあいだの外交的な関係として成り立つており、時としては条約や協定といった形の表現をとることもある。これはいわば、国際関係の制度的かつ静的な側面といつてもできる。しかし、ただちに明らかなように、制度はその内容をなすところの動的

な相互作用をはなれてあるものではない。したがって、この制度面を捉えることは、それなりの意義をもつものであるとしても、より重要なのはこの動的な実態にせまることであると思われる。このようにみると、国民ないし国家相互の関係を論ずるに当たって、ただそれらを代表する機関（政府など）だけに焦点を絞ることでは不十分であり、むしろそれら機関の行動を規定している内部的な要因や状況を、ともに視野にいれておくことが必要になつてくる。さきにも述べたように、「外交史」がしだいに「国際政治（学）」に展開し、例えば「世論外交」といったテーマが取り上げられるにいたつたのは、そのためと考えられる。

現代が国際化の時代だといわれるとき、それはただ単に、ごく少数の人びとのみからなる公的な機関の結びつきだけをさすのではなく、それぞれの国民を構成するよりひろい階層相互の関係の展開、あるいは緊密化をいうものにはかならない。その実質的な内容をあらわす最もいちじるしい指標は、おそらく人的、物的ならびに文化的という諸側面をふくんだ、高度の流動性（mobility）の

がそれであり、しかもそれは個人を単位とすることもあるれば、なんらかの集団を単位とすることも多い。そのような場合には、その個人または集団が相手の社会にどこまで適応できるか、あるいは逆に相手からどのように受容されるかといった問題が生じることになる。この移民のような現象は、それ自体としてみれば流動性の終息には、全般的な流動性なのであるから、やはり他のケースとともに合わせて考えるのが適当であろう。何れにしても、国際化ということの考察において最も重要なのは、この人的な流動性であると思われる。というのは、物資の流动とか文化（正確にいえば文化要素）の流动とかいった他の要因は、結局のところ、人びとの生活に関連するかぎりにおいて、意味をもつものにすぎないからである。さきにわれわれは、「国際化」という事態の内容を考えるに際して、近代における国民国家の成立ということを一つの手がかりとした。国際化が「諸国民のあいだ」、「諸国民の境界をこえる」ことをさすとすれば、それは国民ないし国家の存在を前提して、はじめて意味をなす

うちに求めることができるであろう。ここで問題になるのは、社会内（国家内）の流動性もさることながら、とりわけ社会間（諸国家間）での流動性もさることながら、例えば、国外旅行というような形での社会間の人的な流動は、もちろん従来も行われてきたことであつて、必ずしも新しいものではない。しかし、今日の特徴は何といつても、それが僅かの人びとの特殊な体験にとどまらず、交通手段の発達によって、殆ど大衆的といつてよい程度まで一般化したことである。たとえ一時的なものであるとはいえ、異なった社会の人びとおよびその文化に直接に接触する機会が与えられるということが精神生活におけるよほす効果は、決して少ないものではない。

もつとも、一口に流動性といつても、それにはさまざまな形態ならびに程度が考えられる。いま一例としてあげた旅行は、概して短い期間のものが多いといえるが、時にはそれがかなり長期の滞在にわたることもないわけではない。そしてこのような社会間の人的な移動は、一定の条件のもとでは、ほぼ恒常的なものとなり、定着にいたることもありうる。いわゆる移民（移住）のケース

筈である。この点からすれば、国際化は近代あるいは現代に独特の現象であるということになろう。しかし、検討の途中でわれわれはまた、この国民あるいはとくに政治的（行政的）な単位としての国家が、必ずしも絶対的な準拠枠ではありえないことをみた。そしてさらに、この場合に重要なのは、いろいろな意味での流動性であることが明らかになった。もしそうであるとすれば、国際化は必ずしも近代あるいは現代だけに限られない、ということにならないだろうか。

このような設問は、ことによるとはなはだ唐突な印象を与えるかもしれない。けれども、これまでの歴史を少しく顧みれば、それが決して的外れなものではないことが理解できると思われる。もちろん、「国際」とか「国際化」というような表現は用いられなかつたとしても、それに類比されうるような事態、ならびにそれについての明確な意識といったものは、いろいろなところに見いだされるのである。ここではその一例として、古典・古代末期のことのみ言及しておくことにしたい。周知のごとく、アレクサンダー以後のいわゆるヘレニズム期にな

ると、西方世界においては、それまでの基本的な社会の単位をなしていた都市国家が没落して、より大きな体制のなかに組み込まれ、それとともに人びとの生活や文化のあり方も、きわめて流動的になつていった。これはいわば、その時点における国際化であつたといつてもよからう。そして他方で、当時の一部の人びとのなかには、それに対応する価値観が生まれるようになつた。とくにストア学派が説いたコスマポリタニズム、すなわち「世界市民」の思想は、まさにそのような新しい世界観であり、道徳であったのである。そして、これに類するような事態は、歴史上なお多く見いだされる。

もし「」のような見方ができるとすれば、国際化とは時と場所とを問わず、歴史のなかでつねに働いている一つの方向性にほかならない、ということになろう。それはきわめて単純な、いわゆる未開社会においてさえ見いだすことができるものである。すでにデュルケムは、オーストラリアの未開部族を扱った古典『宗教生活の原初形態』（一九一二）の末尾において、かれらの宗教に「インター・ナショナル」な原理が内在していることを、鋭い洞察

察をもつて指摘した。もつとも、つねに潜在しているこの方向性が、およそ転換期とよばれるような状況において、とりわけ明確な形をとることもたしかである。そして、現代もまた、おそらくそのような時代の一つであるといえるであろう。その意味では、現代の国際化は過去の多くのケースと共通する点が少なくない筈である。ただ、違うところがあるとすれば、それはロバートソンも強調するように、現代においては、人類の生活圏が文字どおり地球の全体を蔽うにいたつたということである。つまり、現代の国際化はまた「地球化」（globalization）なのであり、それぞれの国民もまた個人も、まさにグローバル（地球的）な規模でたがいに依存しあうにいたつたのである。

### III 国際化と宗教の機能

これまでわれわれは、国際化と呼ばれている事態について多少の検討をくわえ、それが歴史のなかで働いている一つの基本的な方向性であることを確認した。それは、言葉を換えれば、個別から普遍へとむかう運動だという

ことができる。それぞれに地域的で特殊な生活を営んでいた人びとは、たがいに接触し交流することで、しだいに共通の地盤を獲得し、よりひろい枠組のなかに位置づけられていくのである。そのような動きを推進する要因が、少なくとも一部、テクノロジーなど生活の下部構造のなかにあることは、おそらく否定できないであろう。現代における諸国民のグローバルな結びつきは、バーガーなどもいうように、明らかに工業的な生産にもとづいた世界的な経済システムの形成がもたらした、一つの結果だといつてよい。

しかし、このように言つることは、必ずしもその他の部分、とりわけ社会的な形態とか宗教をもふくんだひろい意味での文化とかが、全面的にそれによって規定されることまでも認めるものではない。歴史の最終的な動因が何であるにせよ、人間の社会生活や文化は相対的に独立したものとして、ある程度まで、それ自体の内的な法則にしたがつて展開するのである。そこでつぎに、こうした国際化のプロセスのなかで、宗教がどのような機能を果たすのかという問題にむかうことにしてよい。

まず注意しておくべき」とは、「国際化時代における宗教の機能」ということのテーマが、二重の意味をもつてゐるという点である。すなわち、それは一方で、この国際化とよばれる時代環境のなかで宗教、あるいはむしろ諸宗教がどのような役割をになつてゐるのかという、事実にかんする問い合わせる。しかしそれは、他方では、宗教はいかなる機能を果たすことが期待されるのかという、理想あるいは目標についての問い合わせ解することができる。いうまでもなく、これらの二つはまったく別種の問い合わせであつて、たがいに混同されではない。

第一の問いは、現実にみられるさまざまの具体的な事例の分析を必要とし、その積み重ねによつてのみ答えるものである。これに対して第一の問いは、当事者の価値判断によつて決着されるべきものであり、一義的な答えはありえない。以下では、ただちにこのどちらかの立場にたつのではない、試みにいわば第三の道をとることにしたい。それは、考えられうるいくつかの典型的なケースを取りだすことによつて、それぞれの場合に、宗教がどのような機能を果たすかを見るものである。それによ

つて、一定の条件のもとで、個々の宗教がどのような形で作用するであろうかを推定することが可能となると思われる。

つぎに必要なのは、今までただ慣用にしたがつて用いてきた「宗教」の内容を、いま少し詳しく規定することである。さきに宗教は、言語や習慣などとともに、下部構造としての経済あるいは集団の統制にかかる政治から区別され、ひろい意味の文化にふくめて考えるべきだといわれた。しかし、厳密に考えると、この見方は多少の修正を要するといわなければならぬ。というのは、およそ文化が人間の生活様式ならびにその所産を意味するのであれば、それは担い手としての集団あるいは社会と切り離せないものだからである。宗教の教えや教義、あるいは価値観などはたしかに文化の領域に属する。だがこれらは、ただ観念的な形で存在するわけではなく、具体的にそれを信じ、また行じる人びとの集団という姿をとる。つまり、宗教はつねに思想としての面とともに、組織（教団）という面をもち、両者はたがいに独立しながらも関連しているのである。そして、さらにこの組織

じられないことも、また明らかであろう。これらは、国際化の最も主要な指標をなすと考えられる流動性の度合において、大きく異なるからである。身近な経験にてらしてみても、例えば都市的な環境の方がそれ以外のものに比してはるかに流動的であることは、殆ど疑いの余地がない。これは差し当たりは同一の社会内部での問題であるが、また社会相互の間についても、似たような差異が存することが認められる。

いま述べたのは、主としては宗教のおかれている環境的な条件の歴史的な差異にかかる問題である。しかし、それとならんで、むしろ宗教そのものの側の性格や内容の違いというもう一つの問題があり、これら二つは互いに関連しあっている。宗教自体の側での差異のなかでも最も重要なのは、民族的（エスニック）な宗教と超民族的なそれとの区別であろう。多くの——見方によつては大部分の宗教は、何れか特定の民族を基盤とし、また担い手として成り立つている。その宗教の組織も思想的な内容も、ともにこの民族集団と密接かつ不可分である。民間信仰あるいは土俗信仰の類いは明らかにここに属す

の面についてみれば、それが個々の信者から構成されていることはいうまでもない。ここからして、一口に宗教といつても、個人の信仰なしし宗教性をさす場合と、何らかの組織をさす場合とがあることになる。要するに、宗教の機能というテーマは、少なくとも宗教の思想、個人の宗教性ならびに教団という三つの焦点をふくんでおり、それらに即して多角的に取り扱わなければならない。われわれが体験する実際の宗教は、いま述べたような複合的な構造を有しながら、しかもそれぞれに具体的な歴史的状況のなかで、それぞれに特殊な性格や内容をもつてゐるものである。それらのあり方はまさに千差万別である。けれども、それらのあいだにいくつかの典型的なケースを区別することは、必ずしも不可能ではないと思われる。さきにわれわれは、デュルケムによりつつ、ひろい意味での国際化の傾向は、いわゆる未開民族のあいだにさえ認められることに注目した。しかし、そのような過去における国際化と現代のそれとが同じでないことは、改めていうまでもない。そして現代のなかでも、高度に工業化された地域とそうでない地域とが同日に論

る。これに対しても、いわゆる普遍宗教と呼ばれるものは、民族・言語・文化などの障壁をこえてひろまる傾向を内在させており、したがつてまた、地域的にもかなりひろく分布することが多い。ただ、ここで注意すべきことは、この区別が決して絶対的なものではないことである。すなわち、普遍宗教とみなされるものは、とくにその成立と伝播の局面ではたしかに民族などの壁をこえるにしても、定着の局面になると、それぞの民族社会に同化し土着化するのがふつうである。そうでないならば、宗教としての役割を果たすことは、そもそも不可能であろう。他方、一定の条件のもとでは、もともと民族的な性格の宗教がその基盤をはなれて、異なった民族の社会に伝えられ、そこで根をおろすことがありうる。それはまさに、国際化という時代環境のなかでしばしば生じる事態であつて、現代にもいくつかの実例をみるとができるのである。

さて、繰り返し強調してきたように、国際化といふとの最も主要な指標は、地球上の諸民族ないし諸社会間での高度の流動性に求められる。これは、宗教との関連

で見るならば、どうすることになるであろうか。差し当たり言えるのは、すでに示唆したところであるが、活動性と名づけたものについても、いくつかの型あるいは同じではないし、諸宗教のあいだの間接的な伝播と直接的な接触による相互作用とは、一応は区別してみなければならない。ごく卑近な例をとるならば、近年わが国では、クリスマスの風習がかなりひろく浸透してきており。しかし、これをもつて直ちにキリスト教が定着したと判断するならば、おそらく性急にすぎることになる。それはキリスト教の部分的な要素の一つにすぎないからである。けれども、どれほど表面的であるにしても、それをまったく無視してしまうのも、また適切ではあるまい。現在のわが国に、それほど多くはないにせよキリスト教人口が存在することも、また否定できない事実なのである。

このことからも分かるように、地球化の時代といわれる現代の一つの特徴は、これら宗教の部分的な要素の流

度合いがあるということである。つまり、宗教の部分的な要素の流動と、全体としての信者団そのものの移動とは同じではないし、諸宗教のあいだの間接的な伝播と直接的な接触による相互作用とは、一應は区別してみなければならない。ごく卑近な例をとるならば、近年わが国では、クリスマスの風習がかなりひろく浸透してきている。しかし、これをもつて直ちにキリスト教が定着したと判断するならば、おそらく性急にすぎることになる。それはキリスト教の部分的な要素の一つにすぎないからである。けれども、どれほど表面的であるにしても、それをまったく無視してしまおののも、また適切ではあるまい。現在のわが国に、それほど多くはないにせよキリスト教人口が存在することも、また否定できない事実なのである。

「」のことからも分かるように、地球化の時代といわれる現代の一つの特徴は、これら宗教の部分的な要素の流

卷之三

いようなケースでは、相互作用ははるかに複雑な仕方で行われるのであって、そこにはつきりした型を見いだすことは難しいと考えられる。

国際化という状況が、諸社会の交流の機会をたかめる  
ことによって、また宗教（思想としてあるいは組織として）  
相互の接触をも緊密にすることは疑いないが、それは言  
い換えれば、基本的な選択が求められることにほかなら  
ない。受け取る側からするならば、自らを閉ざして異な  
ったものを排除するか、あるいは開放によってそれを受  
容するかが、まず問われることになり、しかも後者の場  
合には、さらにその形式や程度が問題となる。しかし、  
国際化とはただ単に受け取ることだけではなく、また異

う問題がまちかまえているのである。

をもつた社会、民族、文化がたがいに接触し交流する」とで、しだいに共通の地盤が形づくられていくことであり、一言でいえば、流動のプロセスにはかならない。それは、新しいものの創出の可能性をもちながら、他方、とくに既存の秩序の側からみるならば、不安定化を意味することもたしかである。

したがつて宗教、とくに民族的な宗教など、伝統的な組織や価値と結びついたそれが、何れかといえば消極的・否定的な反応をみせることが多いのも、理解しえなくはない。いろいろな形の fundamentalism (根本主義、原理主義) をふくめて、およそ宗教的な保守主義はそのようなものであり、その例は過去も現在も数えきれない。それは、基本的には、それぞれの集団(または個人)の

動と、人的・組織的な面をふくめた意味での流動だが、複雑にからみあいながら進行していることにあると思われる。

アイデンティティをまもろうという、いわば防衛的な方向にそつたものなのである。

しかし、これは決して、国際化の状況のなかで宗教が果たしてきた唯一の機能ということはできない。さまざまな事例を見るならば、これとならんで、少なくとももう一つの典型的な作用があることが明らかになるであろう。国際化いうことがもたらす流動のプロセスは、その必然的な随伴現象として、しばしば伝統の基盤から切りはなされ、拠り所を失った個人や集団をうみだす。それは、もはやふるい形の組織や価値につなぎとめられることなく、しかも、ただ精神的な空白のままに生きることもできないような人びとである。これらの個人や集団にたいして、宗教は時として、新しいアイデンティティの形成のための結節点を提供するのである。

洋の東西をとわず、また各時代をつうじて、国際化とともになう社会的な変動の時期に、新しい宗教運動が発生し、展開することが多いのは、そうした理由によるものと考えられる。時に宗教の橋渡し機能 (bridging function) と呼ばれるのは、まさにそしたものにはかならない。

それは、一見したところ、さきにあげた防衛的な作用とは逆のように思われるかも知れない。しかし、さらに掘りさげてみると、両者はともに生存に意味を与えるという、宗教の基本的な働きの二つの異なるた表れともいえるのである。

(たまる のりよし・東京大学教授)